「奈良とくすり」書評

松尾　和彦

皆様は「売薬」という言葉を聞いてどこを思い浮かべられるでしょうか。多くは富山の売薬と言われるでしょう。でもその富山に負けず劣らずの地が奈良だということはあまり知られていません。この度、セルロイド産業文化研究会もお世話になり何回か訪問したこともある三光丸本舗の浅見潤さんが「奈良とくすり　祈りと治療の歴史」という本を上梓されました。今回は、その書評を書かせていただきます。

先ずは「売薬」というと思い浮かべる富山の売薬について述べることといたしましょう。

江戸時代の富山藩は江戸時代初期に加賀藩から分かれた藩ですが、分家の悲しさで本家から石高に不相応な数の藩士を押し付けられました。加えて黒部川、常願寺川、神通川などの急流河川による水害のために常に財政は逼迫していました。

そこで考えられたのが誰もが世話になる薬を売ることで領地外から収入を得て藩の経済を潤すという方法でした。富山には反魂丹という腹痛に良く効く薬があったことや藩主による奨励策などにより発展していき全国に名前を知られることとなりました。

奈良の売薬は富山より少し後の江戸時代中期頃に三光丸本舗の米田家が配置薬システムを開発したところから始まったとされていますが、歴史のある土地だけに遣唐使が伝えた漢方薬、日本独自の和薬などの伝統がありました。そのような薬が正倉院にも納められています。またトウキ、シャクヤクなどの薬草栽培にも向いた土地柄で寺社旧家が多かったことから秘伝薬として伝わりました。

本書は、そのような歴史的背景、地理的優位性などにより奈良が売薬の地として発展していった姿、薬にはどのようなものが用いられたか、古来より疫病が蔓延したときには薬と同じか、それ以上に頼った祈り、まじないなどにも触れているという興味ある内容となっています。

「奈良とくすり　祈りと治療の歴史」は京阪奈情報教育出版よりの刊行で定価 1100 円(税込)となっていますので、是非一度手に取っていただきたい名著です。